



寄稿

2 和歌山支局の活動について



時事通信社 和歌山支局長

小山内 康之

今回、寄稿の依頼を受け、執筆の機会をいただきました。そこで、一般の方々には少々分かりにくい通信社の業務、活動をご報告したいと思ひ筆を取りました。通信社は新聞やテレビ、ラジオなどにニュースを配信する卸売りのような報道機関です。このため、新聞のように購読すれば、自宅に届けられて読めるわけではなく、テレビやラジオのようにチャンネルや周波数を合わせれば見たり聞いたりできるわけでもありません。和歌山支局の日ごろの活動をを紹介することを通じて時事通信社の業務にご理解をいただければ幸いです。

▽行政中心に取材

「今春に定年を迎える知事室長が4月1日付で教育長になるらしい」。ある晩、支局の記者と飲んでいると、携帯電話に1本の情報メールが届けられました。情報源は秘匿しますが、教育長ら重職の人事は議会の同意が必要です。そこで、関係者に取材すると、議員への根回しも終わっており、人事が覆る恐れはないことが分かり、後日、知事室長が教育長に就く人事を独自記事として配信しました。

先ほど、通信社はニュースの卸と説明しましたが、このニュースは新聞やテレビ、ラジオではなく、行政ニュース「iJAMP」を通じて主に自治体の職員向けに配信されました。人事ネタはどの組織でも関心事であり、教育長人事を先取りした記事は幅広く行政マンに読まれました。

戦後、国策の通信社、同盟通信が解体され、報道部門は共同通信社と時事通信社に分かれました。その際、共同通信社は新聞社、放送局などに配信するマスメニュース、時事通信社は自治体、金融機関などに配信する実務ニュースとそれぞれがすみ分けて発足した経緯もあり、時事通信社にとって自治体は現在も大事な配信先です。和歌山県内でも県をはじめ多くの市町と行政ニュースの配信契約を結んでいます。

このため、時事通信社、とりわけ地方に配属

された記者は行政機関を中心に取材活動を展開し、県や市町村の施策や人事を先取りしてiJAMPに流すことが求められています。新聞社の記者が地方版（県版）を埋めるために、地元のイベントや祭事を細かく取り上げるのと同様に、時事通信の地方記者は行政ネタの掘り起こしに努めます。

iJAMPで配信した行政ニュースの事例をいくつか紹介します。自転車を活用して地方創生につなげようと、全国から約100の自治体の首長が和歌山市に集まり、「全国シクロサミット」が3月23日に初めて開催されました。自転車活用推進議員連盟会長を兼ねる自民党の二階俊博幹事長も会場に駆け付けました。統一地方選を控え、二階幹事長は「健康にも役立ち、自転車で選挙区を回れば当選も間違いない」と語り、会場を沸かせました。和歌の浦や雑賀崎などのサイクリングスポットを抱える和歌山市が開催に名乗りを上げ、悲願の初開催を射止めたこともありましたが、自治体が注目するイベントとあって二階幹事長のコメント、写真付きで大きく扱いました。

和歌山県が力を入れている施策であるカジノを含む統合型リゾート（IR）の誘致や民間初の小型ロケット発射場建設に関連したイベントも重要な取材テーマとなります。8月25日（日）に本州南端の串本町でロケットの、翌26日（月）に和歌山市でIRのシンポジウムが開かれました。いずれも時事通信の記者にとって落とせない案件です。記者は串本町のシンポジウム取材後、現地に宿泊して翌朝に和歌山市に戻るハードな日程をこなし、両イベントをカバーしました。しかも、往復は車での移動です。和歌山に来るまではペーパードライバーだったことを考えると、頭の下がる思いです。

都道府県の司令塔である知事の動向は時事通信の地方記者にとって最も重要な取材ターゲットとなります。定例記者会見の記事化やインタビューなどを通じて頻繁に取り上げます。チョウの収集家としても知られる和歌山県の仁坂吉

伸知事。県の自然や歴史を紹介する教育副読本「わかやま何でも帳」に掲載予定だった希少なチョウ「ナンキウラナミアカシジミ」の標本写真の間違いに気付きました。そこで、自ら所有の標本を提供し、写真を撮りなおして掲載しました。学芸員も舌を巻く知事の博識ぶりを紹介した記事はiJAMPの週間クリック数で上位にランクインしました。全国の知事が一堂に集まる全国知事会では、本記やサイド記事に加え、各知事の発言など討議の内容を伝える詳細を含めiJAMPで大々的に報道します。

地方の記者が、東京の本社の希望の部に上がれるかどうかは、行政ニュースの独自ネタの本数が基準になっていると言われています。「行政ニュースをたくさん書かない記者は本社に絶対に上げない」と言い切る幹部もいます。余談ですが、筆者は大阪支社が初任地でしたが、主に経済や警察を担当していたこともあり、赴任期間中に行政ニュースを1本も書いていませんでした。いまだに、希望の経済部に上がったのが不思議です。

▽記者1人で県内カバー

日ごろは行政中心に取材活動に従事していますが、大きな事件や事故が起これば当然、取材して全国に記事を配信します。夏祭りのカレーにヒ素が混入された事件の際は、大阪支社を中心に多数の記者が入り替わり和歌山に応援に駆け付け、各社と報道合戦を繰り広げました。昨夏には田辺市で資産家が自宅で変死体として発見されました。この資産家は自身の女性遍歴などを赤裸々に綴った著書も出版し、「紀州のドン・ファン」として知られる有名人。テレビのワイドショーや写真週刊誌を中心に報道が過熱しました。

時事通信の記者も田辺に車で駆け付け、参戦します。資産家の体内に致死量の覚せい剤が投与されていたことを掴んで配信したところ、神戸新聞に掲載されました。発生から1年が経過し、難航する捜査の現状を伝えた今夏の記事

は福島民報に掲載されました。時事通信の記者は事件や事故を軽視しているわけではありません。記者の名誉のために書き記しておきました。

ただ、時事通信の支局は「1人支局」。つまり記者が1人しかいない支局が圧倒的に多いのが現状です。1人で県政、市政、警察、司法などをカバーせざるをえません。取材と同様に大変なのが、定期的に回ってくる幹事業務です。筆者も仙台支社に編集部長として赴任していた時に、現場の記者の幹事業務を代行したことがあります。当時、知事の定例記者会見は幹事社が仕切り役として、最初に複数の質問をするのが慣例でした。県政担当の記者が他の案件で知事会見に出ることができず、何度か会見を仕切りました。

和歌山でも各クラブに幹事業務があります。なかでも大変なのが司法記者クラブです。裁判員裁判の仕切り役をこなしたり、起訴状を代表して取りに行ったり、各社の意見を集約して当局に伝えたりと幹事月は多忙を極めます。筆者も何度か代役を務めました。過去に加盟各社にご迷惑を掛けたケースが多々ありました。この場を借りてお詫びを申し上げます。

▽営業8割、編集2割

さて、報道に関する活動を紹介してきましたが、現場の記者は取材に専念してネタを取り、「書いてなんぼ」でいいのですが、管理職の支局長は違います。「売ってなんぼ」なんです。これまで筆者は記者と、現場の記者が書いた原稿を手直しするデスク、いわゆる編集職しか経験しておらず、和歌山で初めて支局長になりました。和歌山に赴任する前に、本社で支局長研修を受けた際に、営業担当の役員から「支局長は営業8割、編集2割の配分でがんばってください」と言われ、戸惑いを覚えながら赴任しました。

実際、支局長を経験して感じたのは「支局長」というより「営業部長兼事業部長」のほうが実態を表していると思います。「営業部長」の最

大の業務は、先に触れた行政ニュース「iJAMP」の契約獲得と講演会組織である「内外情勢調査会」の会員獲得です。特にiJAMPは現在も売上高の3割程度を占める主力の商品で、大企業の少ない地方では販売に力を注いでいます。

とはいっても、このご時勢、なかなか新規の契約は取れません。iJAMPの主な契約先である自治体はどこも財政事情が厳しく、値下げや解約を求められます。時事の記者が行政ニュースにウエートを置いて取材するのは、iJAMP契約の獲得・維持のための営業対策の側面もあります。自治体頼りでは先細りになるので、県の外郭団体や大学、県議会の議員らと売り先を広げています。

「事業部長」としての役割は講演会「内外情勢調査会」の運営です。講演会は年に10回、開催しています。毎回、講演会を開くホテルの会場を押さえ、講師を決めて会員に出欠確認の案内状を配ります。講演当日は講師を最寄りの駅まで迎えに行き、会場までアテンドします。講演では司会兼進行役を務め、講演終了後、講師が宿泊する場合は夜のお供に、帰られる場合は最寄りの駅まで送迎します。同じく和歌山で講演会「正論」を運営する産経新聞の和歌山支局長と互いに「まるでイベンターやな」と自嘲気味に語り合ったものです。

昔、先輩記者から九州の某県の電話帳に日本電信電話公社（現NTT）と同じ欄に共同通信社と時事通信社の支局が掲載されていたと聞きました。通信イコール電話と勘違いされていたそうです。徒然なるままに和歌山支局の活動を通じて通信社の業務をお伝えしましたが、ご理解いただけただけでしょうか？最後に和歌山支局の取材、営業に協力してくださった県民の皆様に感謝を申し上げて筆を置きたいと思います。